

NPO 法人



2017年12月10日

第36号

Jomon Shiba



特定非営利活動法人

縄文柴犬研究センター

群馬県川場村ふじやまの湯交流会報告	2
現地責任者：栞原明美、群馬県：荻野千恵子	
*愛犬のしおりから	
菅原久喜、坂本勝、金沢聡、大岡早苗、堀一郎、長井一詩	
榊井誠、渡辺義広、栗生隆行、佐々木俊幸、梅野修身、五味靖嘉	
高橋守一、黒梅明、竹村節子、高橋幸一、土山仁美、藤原勇雄	
栞原明美、柳田昌男、小林耕治、荻野千恵子、土井下千明	4
シバの散歩道(34) 根深 誠	10
おたよりコーナー ☆京都府 金 平雄	13
☆神奈川県 劔持輝久	13
☆富山県 杉山春美	14
☆秋田県 五味靖嘉	15
☆ML 交信から 向井亮太・土井下千明・五味靖嘉、柳楽倫、岡村智鶴	19
事務所報告 ☆新入会 ☆会費 ☆仔犬登録 ☆寄贈	20

会誌の表紙写真を募集します

JSRCの会誌は年4回発行していますが、表紙写真は毎年度改定しています。表紙は縄文柴犬をアピールする重要な手段で、これまで縄文柴犬の特性を示す様々な角度からの写真を載せてきました。来年度の会誌表紙写真を募集しますので、日常の縄文柴犬との暮らしの中でとらえたショットをぜひお寄せください。

平成30年3月末に募集を締め切り、事務局等で審査の上、来年6月号から再来年の3月号までの表紙を飾ることになります。

写真の題は問いませんが、写真に人が一緒に写っている場合には、その方の了承を必ず得てください。送付先は事務局（会事務所）までお願いします。

◆次号会誌37号発行は2018年3月10日予定。原稿の締め切りは2018年1月20日です。

お便り募集

会誌を楽しく親しまれるものにするために、皆さんのお便りをお待ちしています。お気軽に原稿をお寄せください。また、スマートフォンやパソコンでメールをされている方は、メーリングリスト（縄文ひろば）にご参加ください。いつでも気軽にメール交信で全国の会員と意見交流できます。参加ご希望の方は事務局（会事務所）に連絡ください。

☆会誌の原稿は、会事務所に郵送、又はメールでご送信ください。ぜひ、愛犬の写真も添えてください。

特定非営利活動法人 縄文柴犬研究センター

会事務所：〒014-0073 秋田県大仙市内小友字堂ノ前119番地5 ☎0187-68-2976

<http://www.jomon-shiba.com/> encounter_shiba@jomon-shiba.sakura.ne.jp

郵便振替口座：02280-2-106951

群馬県川場村ふじやまの湯交流会報告

2017 年 10 月 7~8 日



川場村交流会を振り返って

理事 栗原明美 (群馬県 現地責任者)

10 月 7・8 日、群馬県北部、川場村の人里離れた温泉宿、ふじやまの湯で今年度の交流会が行なわれました。

関東地方では初の交流会。これまで東北方面が多く、距離的に見送っていた方にも参加検討範囲だったためか、22 名という多くの会員と、愛犬 10 頭、見学者 4 名が集う賑やかな交流会となりました。

昨年の新潟県十日町市交流会で、「来年は群馬で」との推薦を引き受けたものの、何度か現地に出向きましたが条件を揃えた宿は見つからず頭を抱えていた時、荻野さんと「ふじやまの湯」を見つけ、IC から遠くなく、周辺に気遣い不要の山間地、犬を係留できる広々した駐車場、貸切できる温泉宿、ここなら皆さんをお迎えするには最適と予約をいれ、ひと安心ができました。

そしていよいよ開催日。心配した雨の予報が運良く外れ、朝には雨があがる好スタートとなり、7 時半、高速バスで新前橋駅に到着していた土井さんが同乗し、一路川場村へ。川場村へ入ると稲穂の垂れた田んぼや赤く色づいたりんごが現れ、会場はもうすぐ！とワクワク感が湧いてきました。会場へ到着すると間もなく遠路秋田から五味さん、地元群馬の荻野さんが到着。会場準備をしているところへ金沢から黒梅さん・土井下さん組が愛犬を連れて到着。初参加の神奈川の高橋守一さんや新潟の高橋幸一さん御夫妻も愛犬を連れ

ての到着。次々と他県ナンバーの車が到着します。長野の肥田さん、新潟の相沢さん・初参加の井上さん御夫妻、神奈川の藤原さんはご家族 3 人で参加です。県内からも小林耕治さん・小林永治さん、都築さんが到着。残すはコース間違いで遅れると連絡のあった初参加の長野の竹村さんと電車組の岩手の東先生、和歌山の土山さんの 3 人を待つばかりとなりました。皆さん駐車場に車を留めると早速犬連れで和気あいあいと交流が始まっていました。会で繋がっている連帯感、いいもんですね。



交流会会場：ふじやまの湯

宿の田舎食堂で昼食をとった後は、広間でプロジェクターを使い学習会です。最初は五味さん講師の「縄文柴犬の姿と形」。食餌に関わる重要な講話なのですが、開始後地元紙（上毛新聞）の記者が取材に来たので、私は記者対応でした。次は岩手大学農学部・保全生物学動物生態学講師 東淳樹先生の「なぜ縄文柴犬なのか」。交流会で東先生が講師をされるのは今回が初めてですが、縄文柴犬に興味を持たれたきっかけや、獣害対策としての縄文柴犬の必要性、今の会の運営はボランティアで成り立っているが将来的には援助金などの支援が必要…などを、親しみやすくお話していただきました。講義後は次々と質問の手が上がり、愛犬への関心の高さが伺えました。

学習後、地元紙の取材対応も兼ね、外に出て夕方の駐車場交流。バッチリいい写真に収まったようです。JSRC の新聞デビューになるのでしょうか。

お楽しみの夕食は鱒の塩焼き等地域の食材中心のヘルシー料理。会員からの土産の地酒も振舞われ、犬談義が尽きないようでした。この交流会のもうひとつの楽しみは温泉。自慢の温泉と期待していたのに、私は宴を楽しみ入浴時間を逃してしまい残念至極。

初参加の 2 人を含む 4 人部屋へ戻ると、話が尽きることなく夜更しをしてしまいましたが、これこそ交流。良い思い出となりました。

翌朝 6 時、早朝犬連れ散歩に出かけると、2 頭を連れた小林さんから複数飼ってみなければ分からない習性など興味深いお話をお聞きし、多頭飼願望がチラッと頭を過りました。

朝食後解散となり、皆さん川場村の旨いものをチョイスしながらお帰りになったことと思います。たった 1 泊の交流会でしたが、参加しなければ得られない情報や貴重な体験が出来たことと思います。参加の皆さんいかがだったでしょうか。今回参加者が 22 人と多く、それなりにきっちり準備し予定表に沿って進行する形で、少し堅苦しくなってしまったように感じました。会員同士の交流が目的なのですからもっと気楽に顔合わせができれば良かったのでは。というのが私の今回の反省と希望です。

来年の会場は未定ですが、ぜひ参加し、皆様とお会いしたいと思っています。



学習会

夜の懇親会

朝の散歩風景

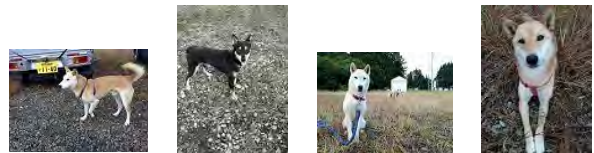
交流会に参加して

群馬県 荻野千恵子

今回の交流会は地元群馬での開催でしたので宿泊を考えていましたが、結局前回同様、日帰り参加となってしまいました。五味さんの保存についてのお話、東先生の講演、会員の方の体験談、これらを聞くことができ大変有意義でした。動物との共生、獣害対策など、私たちが考えていかなければならない事がたくさんあると感じました。富山や新潟の方の犬の散歩のお話は、獣害対策として社会貢献している縄文柴犬の重要性を示してくれた貴重なお話だったと思います。このことから NPO 法人としての会の役割は大きく、責任も伴ってきているのではないかと感じます。これからの会の方向性が重要ではないでしょうか。

今回一般の方 4 名を含め総勢 26 名、(犬 10 頭)。出席者の方から色々なお話を聞くことができ、人間同様十人十色 (10 頭 10 色?) のワンちゃん達に接することができ大変嬉しく思いました。私も我が家の雄犬のクマを連れて行けばよかったと後悔しました。雌犬のモモが亡くなってからは他の犬と接することもなく過ごしてきたので、同犬種にあったらちぎれんばかりに尾を振って喜んだと思います。そのクマは防犯対策として日々任務を遂行しています。

来年の交流会で、皆様とワンちゃん達にまた再会できるのを楽しみにしております。



参加した犬たち

↓ 地元の上毛新聞に掲載されました

縄文柴犬の特徴学ぶ 系統維持へ飼い主が交流

更新日時:2017年10月14日(土) AM 08:00



NPO法人縄文柴犬研究センター(本部・秋田県、橋宏理事長)の交流会が川場村の民宿で開かれた。群馬県など全国から会員ら22人が集い、愛犬の縄文柴犬について語りながら交流を深めた=写真。

センターによると、縄文柴犬は、縄文時代に狩猟生活をしてきた人間と共生していた犬の原種性を維持した日本の在来種。鼻の付け根のくぼみ「額段」が深く面長なのが特徴という。

※詳しくは「上毛新聞」朝刊、有料携帯サイト「上毛新聞ニュース」をご覧ください。

シバの散歩道 (35)

根深 誠(文筆家・釣り師・元登山家)

シバとともに「同病相哀れむ」の感がある。古希を境に、私は徐々に老いを感じるようになっていく。めっきり足腰が弱くなった。そのせいだと思うが、摺り足で歩くようになり、歩行中、些細な出っ張りや畳の縁などに足をとられ、バランスを崩すことがある。転倒しそうになり、思わず、柱に手をかけ、バランスを保つこともしばしばだ。

一方、シバは庭に立ってじっとしているときなど下半身が震えている。被毛が薄くなってきた。捲くれ上った尻尾も細くなり、人に瞥えれば私同様、如何にも貧相で貧乏臭い。秋、日が短くなり陽射しが衰えるにつれ、寒いのか、小春日和の日あたりにいるときはいいのだが、日がかげると、小屋のねぐら箱に潜り込んで出てこない。大丈夫か、と声をかけ、擦ってやることもある。気持ちよさそうに目を細めてうずくまっている。

これからは年毎に日々、老いが進行し、よぼよぼになっていくのだから、それなりに対処するすべを身につける必要がある。それには、まずはともかく無理は慎むことだろう。シバとともに、老いを見つめるながら過ごすように心がけることである。

しかし実際のところ、心がけているつもりもないのだが、体力減退が著しく、飼主飼犬ともども敏捷性を欠くようになり、動作が緩慢になってきた。とくに私の場合、機敏な行動がとれなくなった。おまけに足裏やくるぶし、右腕の筋肉が痛み出した。酒の飲みすぎ、痛風などと勝手なことを友人知人に言われて外科医院に行き、レントゲン検査をしたが、骨には異常なし、とのこと。二週間分の湿布と飲み薬を出されて飲んだが効き目がない。通院し、さらに二週間分の湿布と飲み薬を出されたが、結果は治らない。

噂によると、その医院はヤブだとのこと、私はやっぱりなるほどと納得し、その後、通院は中止にした。がまんできそうにないほどの痛みではないのだから放っておくことにした。それに、薬を飲みつけて胃の調子が悪くなったようだ。だからといって、どうせ、医者であれやこれやと言ってみたとこで、せいぜい薬を替えられるのが関の山だろう。

通院もさることながら、私は老化のせいだと思うのだが、日中、睡眠をとるようになった。昼日中、眠くなるのだ。朝食後ひと眠り、昼食後ひと眠り。ボケがはじまっているのだろうか。

こんな体たらくではいかん、と自らを引き締め

るため朝食昼食を抜きにしてみた。しかし、それでも眠くなる。もしかしたら睡眠不足かもしれないと考えた。たしかにそのふしもある。深夜三時には目覚める。遅くても夜の九時には就寝するようにしているのだから五、六時間は眠っている。若いころにくらべて短いかもしれないが、睡眠不足というほどではないだろう。

三時ごろ目覚めるのには、それなりにわけがある。シバも老人になった私に似て、目覚めが早くなった。そして、散歩に行こうと鼻を鳴らして催促するのだ。小屋から出て、玄関の前で、しつこく催促するから、私は寢床を出て玄関を開け、「うるさいッ、寝ろ」と近所迷惑にならないようにちいさな声で恫喝する。すると、すごすごと小屋に入るのだが、しばらくすると出て来て、また鼻を鳴らす。恫喝すると、再び、小屋に入る。

三度目には玄関に入れることにしているのだが、この間、二時間ほど、私はうとうと布団の中で居眠りしている。玄関にマットを敷いて入れると、シバはしばらく寝そべってから再び鼻を鳴らす。

こうして私が起き上がるころには夜が明けはじめるのだ。

雨降りの日は例外で、シバは小屋から出ようもしない。鼻すら鳴らさないの、私は十分に睡眠をとることができる。途中、目覚めることもなく、早朝六時ごろまでは眠っているから、やはり、朝の暗いうちに目覚めるのは、シバの散歩が気になっているからだ、ということになる。

シバは老化で声に艶がなくなり耳も遠くなったようだ。呼んでも聞こえないのか、反応が鈍い。以前は敏感に気配を察知していたのだが、いまでは私が戻って来ても、足音をしのばせると、小屋の中のねぐら箱に丸まって頭を上げようもしない。ゆっくり静かに玄関の戸を開けると気づかない。ボケ犬になったようだ。



それでも食欲食い気だけは旺盛である。朝夕の散歩のあとで与えているのだが、雨降りのときは、散歩が終わると小屋に入ったまま食事にも出て来ない。与えないでおくと、止んだあと要求する。それが夕方だったりすると、私としては夕食をかねて与えるわけだが。相手はそうは思っていないようで、食い終わってしばらくすると食事を要求して鼻を鳴らしたり吠え立てたりする。

しかも、一食の量が多いのだ。私たち家族の一人ぶんより多いかもしれない。先日、新聞の集金人が、鍋に入れたその量を見て驚いていた。

「家でも同じくらいの大きさの犬がいますが、この半分ぐらいですよ」

それなのに太っているのだという。シバは痩せているわけでもないし、太っているわけでもない。たしかに私から見ても、ずいぶん食べると思う。糞の量もけっこうなものだ。

※ ※ ※

四季折々、毎日毎回、同じコースを散歩しているのだが、何かしら注意を引くものがあるから不思議な気がする。それ自体は珍しくも何でもないにもかかわらず、それなりのメッセージを発しているということなのだろう。それを私はメモ代わりにデジカメに納めて愉しんでいる。その愉しみの集積が私の人生ではないかと思うことがある。

ある日あるとき、カラスアゲハがアスファルト道路の路面で死にそうになっていた。もはや、舞い上がるエネルギーが残ってはなさそうだ。瀕死の状態でかすかに翅を震わせている。もがき苦しんでいるのだろうか。生死流転は世の常なるを、とちょっと気取ってみながら、車に轢かれないようにと道路わきの草むらに移してやる。



路面に落ちたカラスアゲハ

また、ある日あるとき、マムシの幼蛇が路面で雨に打たれていた。注意深く見ようとして近づくと鎌首をもたげる。攻撃態勢をとっているのだろうか。放っておくしかない。



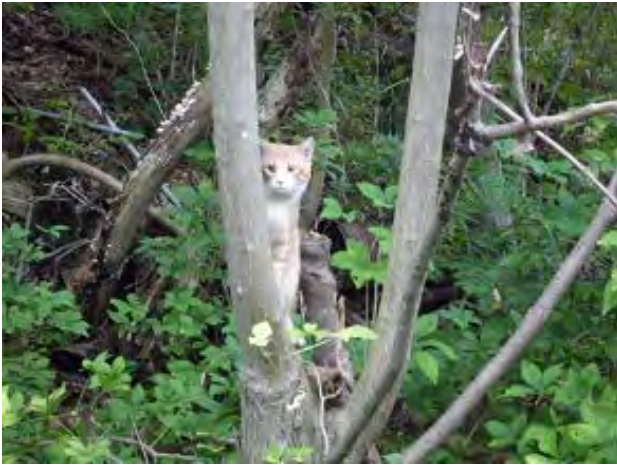
路面で雨に打たれるマムシの幼蛇

そして、またある日あるとき、珍しいことにカルガモの親子連れを見かけた。以前はよく見かけたものだが、私の見るかぎり、温泉が流れ込むようになってから姿を消した。いくら水質がよくなったから現れたというこのなのだろうか。カワセミも見かけるが、私のデジカメでは撮影が難しい。性能が劣る。



カルガモの親子連れ。シバがもの珍しげに眺める

近ごろ、ネコも見かけるようになった。誰かが餌づけをしているようで、だいたい同じ場所で目につく。シバがいるせいか、私たちが近づくと逃げて、木に登ってこちらの様子を窺う。年老いたシバは以前とは異なり、いきり立って追い駆けるようなことはしなくなった。



木に登ってこちらの様子を窺うネコ

今回、日々の散歩を振り返って印象に残るのはアケビを見つけたことだ。溪流釣りや山でならともかく、シバとの散歩でははじめてである。いまままで気づかなかったのは、今年始めて実をつけたからではないかと思う。

遊歩道のすぐわきにあるイチイの木に絡みついていて、独特の澄んだ明るい紫色の立派な実で、見つけたときは、白くひと筋線が入っているだけで割れてはいなかった。十数個はある。

そのうち誰か散歩者が見つけて採るのだろうか。それとも、そもそも他人の屋敷だから遠慮して採らないだろうか。採るとしたら屋敷の持ち主だろうか、数分離れた場所に家がある。農家であり、家の裏手の道路わきの境界に生えているのだから、あるいは気にも留めてはいないと思われる。やはり、採るとすれば散歩者しかいない。

いろいろさまざまな想念が浮んだ。

私としては少年時代ならいざ知らず、いくらなんでも他人の屋敷のアケビを採るわけにはいかない。これが良識というものだろう。

何日かして天気の良い日の午後、思い通りに、割れていたアケビの写真を撮った。



ぱっくりと口を開いたアケビ

ま白きは青むらさきの外皮が割れて内なるアケビの果実

外皮が割れて、内部の白い実がとろけるようになると甘みが増し、山ではヤマブドウと並んで野生鳥獣の好物だ。散歩コースは山とは違うので、採るとしたら散歩者以外にはありえないと私はふんだ。他人の屋敷だから採らない、などという良識はめったには通用しない。冬場の除排雪にしてもけっこう利己主義者は多いのだ。まったく嫌になる。

数日後、すれ違った散歩者がアケビの入ったビニール袋を手をしているのを見た。多少の後ろめたさを感じているのだろうか、心なしか、私にはその男がコソ泥みたいにおどおどしているふうに見えた。

アケビはどうやって食するのだろうか。挽肉を詰めて炒めるのだろうか、それとも焼酎に浸けてアケビ酒をつくるのだろうか。

※ ※ ※

今年もまた、ハクチョウの渡りの季節になった。しぐれとともに飛来するようだ。天気が悪いと外敵に襲われる危険が少ないからかもしれない。雨がやんだ夕方、雲の切れ間を啼きながら、鉤形に編隊を組んで南へ飛行していった。私が今年始めて啼き声を耳にするのは去年より数日はやい。

以来、つぎつぎと編隊が見られた。深夜、寝床に潜りながら啼き声を聞くこともあった。

ハクチョウの渡るころ聴き夢うつつ秋もふかまる夜のしじまに

秋いまごろと、そして春先、北へ帰るときのハクチョウの啼き声は初夏のカッコウとともに風物詩になっている。とりわけ、いまごろの飛来は冬の前ぶれである。冬は私にとって近隣の雪かき騒音に悩まされる季節だ。

